
勇者と試練の旅

ICE ALGAE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と試練の旅

【Nコード】

N9817U

【作者名】

ICE ALGAE

【あらすじ】

彼女は勇者。ある日のこと、少女は国王の住まう城に拉致され、ただ一言だけの下命を拝する。「おい、魔王倒してこい」と。

「おい、服を脱げ」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。わたしはきょとんとして王さまの顔を見上げていた。先ほど、やつに言われたその言葉を頭の中で反芻する。ふくをぬげ、ふくをぬげ。……服を脱げ！？つまりこの場で身に纏う衣服を脱げと！？　ななな何言ってるのこの色情魔！

わたしの行動は早かった。腰に下げていた剣を音速で引き抜き、目の前の男に斬りかかる。容赦なんて、いらないっ！

「シネ、ヘンタイ！」

「勇者様にご乱心あそばせた！」

「いかん、総員防御態勢をとれ！　殿下をお守りしろ！」

ええい、そこをどくのだ兵士さん！　わたしはこの男をあのに世に葬らなければならないんだ！

矢のごとく疾走した勢いを剣にのせ、刃を前に突き出した。狙いは急所。しかし、立ちふさがる鎧兜たちに剣先を受け止められる。がきん、と金属がぶつかる音がした。反動で後ろによるめいたわたしの体を、いつの間にか背後に回り込んでいた兵士たちがここぞとばかりに羽交い絞めにする。がっしり。う、動けん。こら、はなせ！　はーなーせー！

「がるるるるるる」

「はっ、あれしきの言葉で取り乱すなど、まだガキだな」

身動きが取れなくなったわたしを見下すような視線で一瞥していた王さま。冷たい青色の眼がわたしの視線とかち合う。すると、やつは心底愉快、といった感じに口元を歪めた。うがあああああああ、余裕そうな表情浮かべやがってえ！　腹立つう！　腹立つわこいつう！

わたしは激怒した。呆れた王だ、生かして置けぬ。

「ふしやあーっ」

「……お前は畜生か」

呆れたような声を出された。

王さまの青色の眼を睨みつける。すると、やつは威嚇するわたしに恐れを抱いていないのだろうか、つかつかとこちらに歩み寄ってきた。む、いったい何をするつもりだこの男。じっとやつの行動を注視する。

頬をそつと掴まれた。そのままゆっくりと左右に引っ張られた。
の、のびる。

「ひよえひよえひよえ」

「くくく、痛快な面だな」

え、ちよつと、言葉とは裏腹に眼が笑ってないんですけどこの人。口と眼の感情がなぜかリンクしてないんですけど。

やつが、猛禽のような眼をこつちに向けてくる。獲物を狙うようなぞくりとする視線。わたし、何かしたんか。喰われる。

びびった。

いや、びびってない。びっくりしただけなんだ。ほんとだって。信じて。

やつはしばらくその視線でわたしを射すくめた。しかしふと、瞳を閉じ、止まっていた手を動かし始める。むにむにと。……ただ遊ばれているようなので、硬直していた身体の力を幾分か抜いた。やれやれ、ガキの相手は疲れるぜ。

王さまの手がわたしの頬をぐにぐにしている。ぐに。ふ、どうだ、わたしの天使のようなほっぺの手触り。

反動をつけて思いつき頬をのばされた。

「いひやいいひやいいひやいよう！」

おおおおおおお裂けるううう！ わたしの頬はマシユマロのよくにデリケートなのがいい！

前後に左右にぐるんぐるん首を捻って手を振り払う。ぐきり、と首で妙な音になったが気にしない。わたしをホールドしていた憎き

兵士の腕をするりと逃れる。王の間に敷かれた赤い絨毯の上を横に転がって、素早く起き上がった。戦闘態勢。殺気を込めて、剣の切っ先をやつに向けた。

赤くなつた頬を剣を握ってない方の手で押さえ、眼に涙を浮かべるわたしの様子を見て、やつはにやりと笑って言った。

「最高に愉快だな」

「うわあああああああもう我慢ならん！ 今すぐ抜け、構えろ！ この場で叩き斬ってやる！」

「俺がお前のような薄汚れた小娘の相手をすると思うか？ 冗談は顔だけにしておけ」

ようし、わたしは決めたぞ。魔王退治の前にこいつをこの国から駆除やる。

……その前にいったん落ち着こう。落ち着けわたし。このまま逆上すればやつペースに巻き込まれてしまう。

目の前のサディストを無視して、わたしはとりあえず、血が上つた頭を冷やすために深く息を吸うのだった。

+

事の顛末は、王さまの一言から始まった。

「おい、魔王倒してこい」

突然だった。いきなりだった。

ベットの上でごろごろしていたわたしは、不意にかけられた声に反応する間もなく、踏まれた。頭を。圧迫感。ぐえ、と喉から変な声が出た。厚い布に顔が押し付けられて息ができない。ふがふが、と声になっていない言葉を喋る。

わたしを踏みつけた王さまの一言は淡泊なものだった。

「頭がたけえ」

おい、ちょっと、わたし今、これでもかってくらいに頭を布に押し付けてるんですけど。

というか、ここわたしの家だよね。……どこから湧いてきた。

「あまり踏み心地はよくないな」

だったら足どけてよ！ カチンときて思わず叫んだものの、呼吸すらままならないこの状況、いかにして声を音にすべきだろうふがふが。いい加減息が苦しいので、この男にそれを分かってもらいたい。どうにかして。わたしは脳をフル回転して、必死で策を考える。数秒間の思考。とりあえず、わたしは手足をじたばたさせてみた。ベッドの上で力いっぱい跳ねる。気分は水揚げされた魚だ。ぴちぴち。ぴちぴち。

とたん、首筋に激痛。

何が起きたのかわからぬまま、視界が黒く染まった。

十

目が覚めたら床の上に捨てられていたと。

え、これって誘拐なんじゃ。思い返してみれば、王さまがわたしにしたことは完全な犯罪だった。人の家に勝手に侵入し、成人間近の少女の意識を奪って昏倒させ、城に連れ込んだ拳句、目が覚めた少女に、服を脱ぐこと要求する暴挙。

え、もうホントこの人嫌なんだけど。斬っていいよね。

うふふ、と剣を頭上に振り上げながら、スキップで王さまの元に近づいていく。

三歩目の足を踏み出したとき、王さまの眼が、ぎょろりとしこちらを向いた。

「ひっ」

情けない声を上げてしまった。わたしの体は硬直して動かなくなる。

いや、びびってない。ただ青い目が綺麗になって。ほんとだって信じて。

「おい、小娘」

「はいっ！？　なんでございましょう！」

王さまに低い声で呼びかけられ、訓練を受けた兵士のようにからだをぴんつと張ってしまふ。手から剣の柄がすべり落ち、床に当たって乾いた音を立てた。

「服を脱げ」

「あんたまだ言ってたんか！　脱ぎませんよ、人前でそんなはれんちなことしませんとも！　だいたい、嫁入り前の娘になんてことを要求してるんですかあんた！」

「安心しろ。お前を嫁にとる酔狂はいない」

「ひ、ひどい！」

傷ついた！　今のはリアルに傷ついた！　がーん、と頭の中で擬音が聞こえた。

王さまが、やれやれ、とでも言う様に肩をすくめる。

うつ……ひどい。王さまのばかちん。はげ。はーげー。

唇を噛んで下を向く。

「冗談だ、小娘」

優しい声がかけられる。こっそり涙を拭っていた手を止めると、俯いていた顔をあげた。王さま……？

歪んだ視界の向こうで、王さまが微笑みを浮かべている。手に、銀色の何かを掴んでいた。お城の灯りを反射して、きらりと眩く輝いている。

あれはなんだろう。首を傾げる。王さまが、銀色の何かを頭の上に掲げた。

「ほら、初期装備だ」

そのまま大きく振りかぶって全力でこちらに投げ……ってわああああああああああ！

目の前が真っ黒になる。がん、と鈍い音がした。おでこが割れるような痛みが奔る。わたしは後ろにぶつ倒れた。ごん、と床に頭を打ち付ける。ひぎっ。う、うおおおおおおおいてええええええええええ！　頭があー！　わたしの頭がああ！

「ふむ、兜の硬度はばつちりだな」

「ごろん、と視線の先に転がってきたのは鉄兜。お前……お前つてやつはああああ頭痛いよおお。激痛に悶えて、絨毯の上をごろごろ転がる。」

「いつまで床に寝ているつもりだ、小娘。この俺が直々に装備をくれてやったんだ。さつさと服を脱いで、着替えろ」

上から人を馬鹿にしたような声が降ってくる。容赦ねえ。容赦ないでえ、この王さん。わたしはすでに立ち上がる力はおるか、文句を言う気力もなかった。頭が痛すぎる。じんじんする。思わず自分の頭部が変形していないか疑ってしまう。

「とつとと起きろ、この愚鈍が」

「ふぎゅ」

すると、腹に圧迫感。硬い何かが胃のあたりをぎりぎりと押しつぶしている。痛みあまり眼を薄ら開けて見ると、腹にのっているのは靴だった。それはやけに、装飾された。やつだった。王さまだった。わたしは死んだふりをしたくてたまらなかった。ふみい。腹の圧迫感が増した。ちょ、ほんと、くるし、い。

「殿下、これ以上は！ 勇者様が死んでしまいます！」

わたしが何も言えないでいると、横から第三者の声が響く。首をわずかに捻って見てみると、先ほどわたしを拘束していた兵士さんの一人だった。おお、兵士さん、今まで空気だったからそこにいたの忘れて……た……っ。ごめんね。あれ、なんかだんだん目が見えなくなつて……。

「殿下！」

「ちっ」

舌打ち。

すっ、と腹の圧迫感が消えた。

「勇者様、勇者様、目を開けてください！ 起きてください！」

大きな手に肩を掴まれて揺さぶられているらしい。ぐわんぐわんと耳の周りで音がする。黒く染まっていた視界に少しずつ色が戻っ

てきた。ぼうつとしていた頭で考える。今わたしを揺すっているのは、兵士さんだろう。心なしか、わたしを揺り動かす動作が優しい気がする。

「勇者様！　しっかりしてください！」

唇を動かして返事をする。

「おおゆうしゃよ、しんでしまうとはなさけない」

「ご自分でそれを言いますか！」

おお、目の調子が元に戻った。

果たして、ぼやける視界に映り込んだのは、鈍い輝きを放つ、ずんぐりした鎧兜だった。

わたしの体を支えてくれていたのは、兵士さん、やはり君だったのか。

「ねえ、兵士さん」

「なんですか」

彼の腕に支えられながら、わたしは兵士さんを上目使いで見上げる。

「王さまの靴ってさ、やけに厚底なんだね。もしかして王さまって身長がひく」

い、と開いた口の中に銀色に輝く刃を突っ込まれた。鉄の味がする。

わたしは青ざめて、兵士さんの後ろに焦点を合わせた。

王さまがこちらを見ていた。

王さまは笑顔だった。

誰かたすけて、と思った。

+

「ごめんなさいするから！　ごめんなさいするから許してください
ひひひひひ！」

「さつさと、これを装備して旅に出る」

王さまが何かを言っているが、わたしの耳には入らない。というか、全身に力が入らない。床の上に息絶え絶えで横たわるわたしの肩を、兵士さんが支えてくれていた。心の中で感謝する。会ったのはついさっきだというのに、兵士さんが戦友か何かのように思えない。

よく、生きてますね……と耳元で呟きが聞こえる。

わたしの舌はちゃんと根元でついているだろうか。

「おお、喋れる」

ひゃっほーい、と両腕をあげて万歳をした。

がしり、と腕を掴まれた。王さまだった。

「小娘、聞いているのか？」

「はい、聞いております」

脊髄反射で答える。全身を耳にして聞いております殿下。

「なら、これを装備しろと言っている」

ずいっと、差し出されたのは、あの鉄兜。神妙に受け取って、手で回してみた。ちょうど額の部分に、べつとりと血糊が付いている。ふっ、全く、いらぬ血を流してしまったものだ。わたしはとりあえず、服の袖で擦って汚れを落とす。

手の中で鈍い光沢を放つ鉄兜を見つめる。

鉄兜。これはきつと、くれるのだろう。初期装備、と言っていたけど、多分そういうこと。魔王討伐の旅の饒別、ということか。

あ、そっか、とわたしは納得した。王さまが服を脱げと言ってきたのは、装備品を身につける、ということか。王さまの趣味だと疑っていたけど、どうやら違ったらしい。なんだ、てっきりわたしは、王さまはそういう人だと。なるほどなるほど。

ふと、気がついた。

あれ、これって頭装備だけじゃん。

「王さま王さま」

「死ね」

尋ねただけなのに死ねって言われた。

「ねえ兵士さん、わたしの剣は？」

「……こちらで預からせていただいてます」

「ちっ」

おっと、舌打ちが。王さまに睨まれ、あわてて口を押えた。
む。

どうやら、体はもう動かせるようだ。わたしは兵士さんに一言お礼を言つて立ち上る。思うように力が入らず、ぐらりと足が少しふらついたが、ただ疲弊しただけだし、すぐにしゃんとするだろう。わたしは王さまにもう一度声をかけてみた。

「王さま、これって、兜だよね。ヘルムだよね」

「見ればわかるだろう、愚鈍が」

「え、下は！？ 下はないの！？」

「小娘ごときにこれ以上の税は使わん」

「じゃあ、わたしに兜だけを被つて外を歩けと！？ なにそれ、超アンバランス！ 首から下超無防備！」

想像してみると、笑える。鉄兜と「ふつつのふく」のチョイス。そんな装備の人間が、街や草原を闊歩する光景。

でも、当事者としては笑えない。重い鉄兜は、頭に被ればただでさえ動きを鈍らすのに、視界を遮ってしまうのだ。そんなので魔王と闘えつか。無茶言わないでください。なにその縛りプレイ。わたし、普通に冒険したい。

渡された装備を涙目で見つめた。鉄兜。格子の間から、黒い内部がこちらを覗いている。腕の中におとなしくおさまった兜。ふふふ、ようし、この子に名前をつけよう。君は今日からブルータスだ。これからよろしくね、ブルータス。名前を呼ぶと、手の中で兜がつるりと輝いたような気がした。隣で兵士さんが引いていた。

お前の剣は城門で受け取れ、とわたしを無視して王さまは締めく

くった。

え……冗談だと思ってたのに、ほんとに頭装備だけなんだ。
え、えっ。

「よし、行け」

「首から下の装備……」

ブルータスだけじゃ防御力がさびしい。ねえ、ブルータス。

うん、ボクもそう思うヨ！

「早くしろ」

じろり、と睨まれてわたしは言葉に詰まった。暴力的な圧力に身を萎縮する。うう……この人怖いよう。もつと優しくしよう。

仕方ない、諦めてとっとと王の間を出よう。腕にブルータスをかかえて、とぼとぼと歩く。心の中で、こっそりと王さまの悪態をつきながら。ばーかばーか。あほー。

別れ際に、王さまが言葉を添えた。

「もし、魔王を倒さずに手ぶらで城に帰ってきたり、或いは、王国からの逃亡を企てようとしたならば」

その言辞にぎくりとした。扉の所でぴたり、と足が止まる。

ゼンマイ仕掛けの人形のようにぎぎ後ろを振り返って、王さまを見る。冷や汗が背中を伝う。凶星だった。思いつき凶星だった。ばれました。逃げようと思ったのばれちゃいました。

王さまは、お前の考えていることは丸わかりだ、とでも言う様になりにやるとする。

目が合った。喰われる、と思った。

わたしは言葉の続きをおそろおそろ促す。

「その場合、どうするの？」

「お前を俺の伴侶にする」

ぜったい、魔王を倒さないといけない。

（後書き）

プロローグのみで終了です。女の子の主人公を一人称視点で書きたくて綴った小説ですが、連載までには至りませんでした。wordのファイルが残っていたので、破棄しようかと思ったのですが、もったいないような気がして載せてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9817u/>

勇者と試練の旅

2011年7月19日03時24分発行